

平成28年9月3日(土)

老球の細道264

8月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

リオ五輪でたくさんの刺激を受け、毎年恒例の終戦にかかわるイベント、ニュースで平和の大切さを改めて考えさせられた8月であった。特に「戦争を知らない」世代である私は、戦争を知らないままこの世とおさらばしたい。父母のお墓参りで痛感した。

1・読書から〈むのたけじ『たいまつⅡ』〉

101歳のジャーナリストむのたけじさんが21日亡くなった。朝日新聞記者時代に終戦を迎え、「負け戦を勝ち戦のように報じて国民を裏切ったけじめをつける」と終戦の日に出社し、故郷秋田に戻り、週間新聞「たいまつ」を創刊した。その後著作や講演などを通じて平和活動を死ぬまで続け、自分の信念を貫いた。30年前に買い求めた『たいまつⅡ』を読み返した。私の怠けた生き方とバスケットボールの指導にヒントになる言葉が再度琴線に触れた。

- ◆「わが身を歴史に刻んで生きているのか？時間に刻まれて生きているだけか？」
- ◆「壮年の当時マサカリのように生きようとつとめた。老年のいまは、鋭く生きたいと、ひたすらそれを願うようになった。巨大な削岩機の細くて小さい先端の、身をよじりながら地底の水脈を求めてつきすすむ、その鋭さがほしい。一日くれば一日鋭くなり、死ぬ直前は生涯で一番鋭い自分であるように、そのように生きることはできないものか」
- ◆「絵画の道をこころざす若い友人にピカソはすすめたという“とにかく描くのだよ、きみ。描きたまえ。描くのだよ。きみ、描きたまえ”と。ピカソの91年の行程をつらぬいたものは、“失敗しないのは、こわいことだ”という哲理だった」
- ◆「〈ひとつ〉を軽く思うな。〈ひとり〉をあなどるな。いまは巨大な結合力が必要だから、なおのこと〈一〉を互いに大切にしよう。千も億も〈一〉からはじまる。〈一〉のつみかさねだ」
- ◆「“不可能”という文字はだれの辞書にもある。人間が“準備”を深めるにつれて、“不可能”が消えていく。(中略)。困難を打開するのは準備である。準備だけである。」
- ◆「非常の際に人間は非常の力を出すというのほうそだね。ふだん気のつかなかった力が非常の際にふき出るだけだ。非常の際に出るのは平常の力量、日常のホンネだ。だから万事にふだんが関ヶ原だ。口ぐせに“いざとなったらやるよ”という人が、いざとなってやったためしはない」

2・新聞等のコラム、その他から

- ◆「マラソンはメンタルの勝負であります。『うわー、暑い』と思うか、『やったー、暑い』と思うか、言葉一つで違ってくる。暑さも気から。これは五輪に限った話ではありませんね」〈朝日新聞・リレーおびにおん・元マラソン選手有森裕子〉

暑い日はこの気持ちでランニングした。私はそのあとに「ビールが美味しい」と続くからがんばれる。冬はどうだろう？「やったー、寒い・・・？」。何事もポジティブだ。

- ◆「年齢はただの数字。好きなものを前にしたら年齢なんて関係ない」〈書籍広告の一文〉

イギリス在住の88歳現役ファッションモデルの言葉。大好きなバスケットボールにおいて88歳、101歳まで私はがんばれるだろうか。老いてもずっと成長を続けたい。